



圖三十四百二第

八面臺閣式(右)

起挑せる飛疊ありて四面皆正しき樓閣。
遠殿式(左)



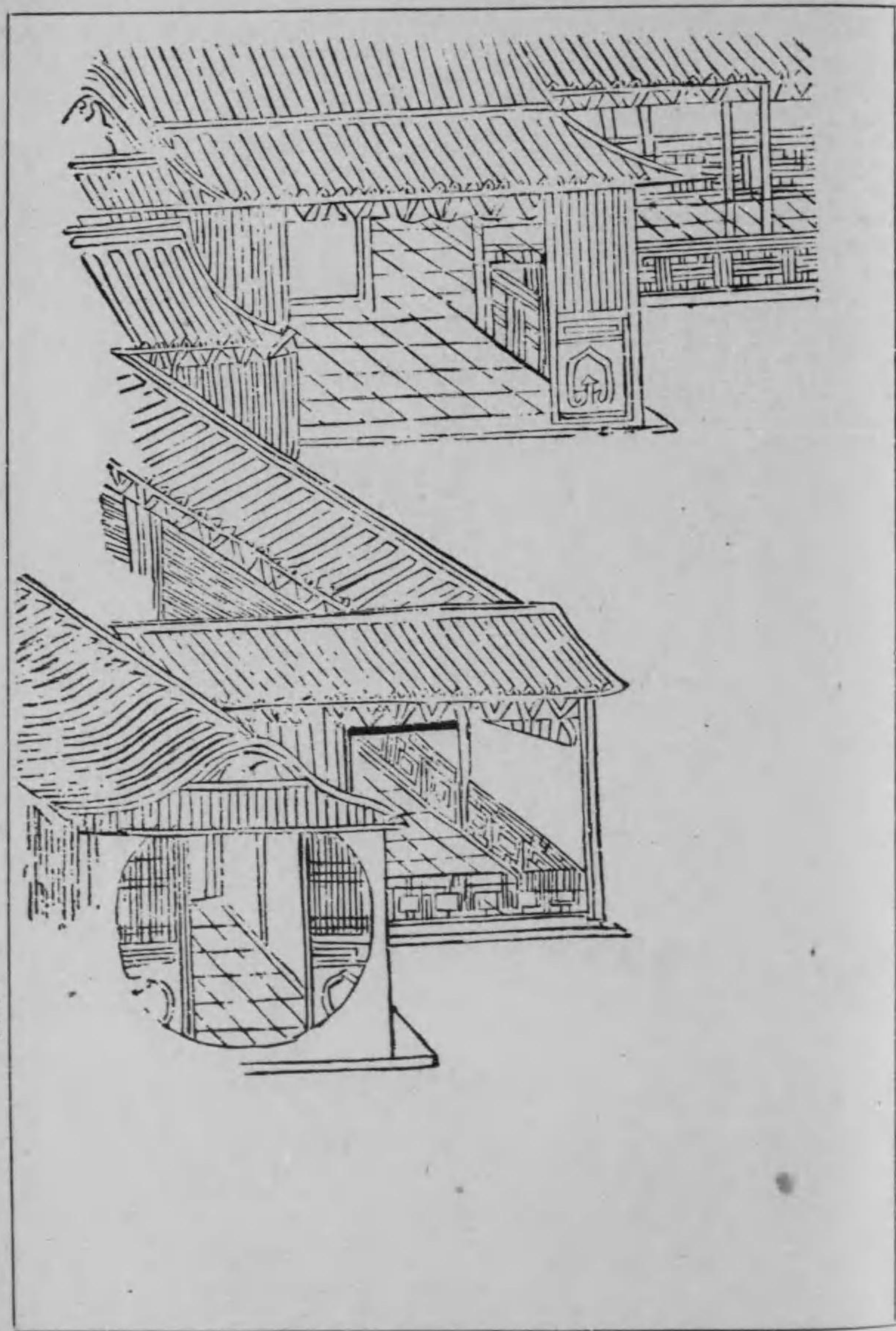


五七九

圖四十四百二第

重軒列陞殿式

五七八

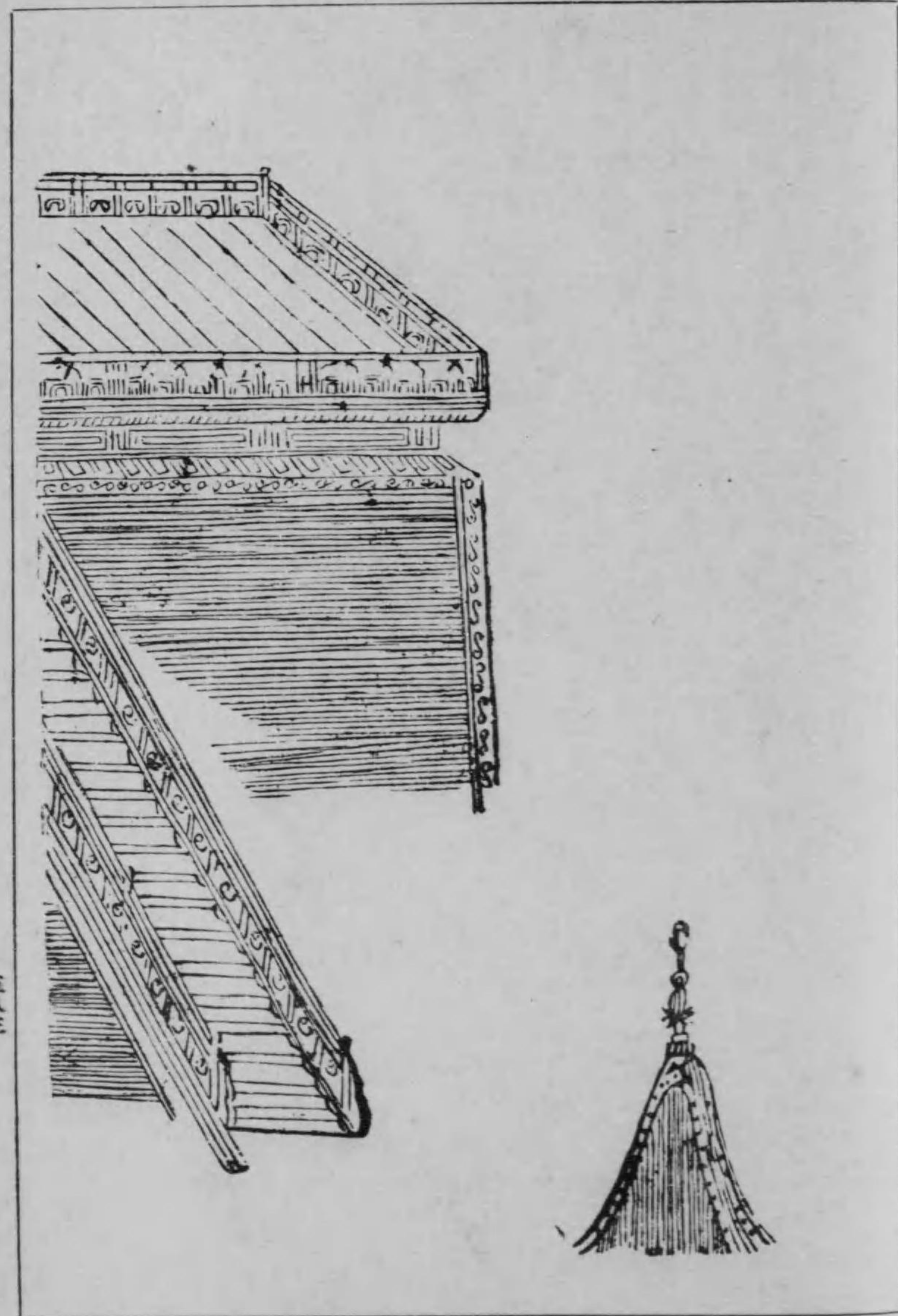


五八一

圖五十四百二第

迴廊曲檻宮式

五八〇

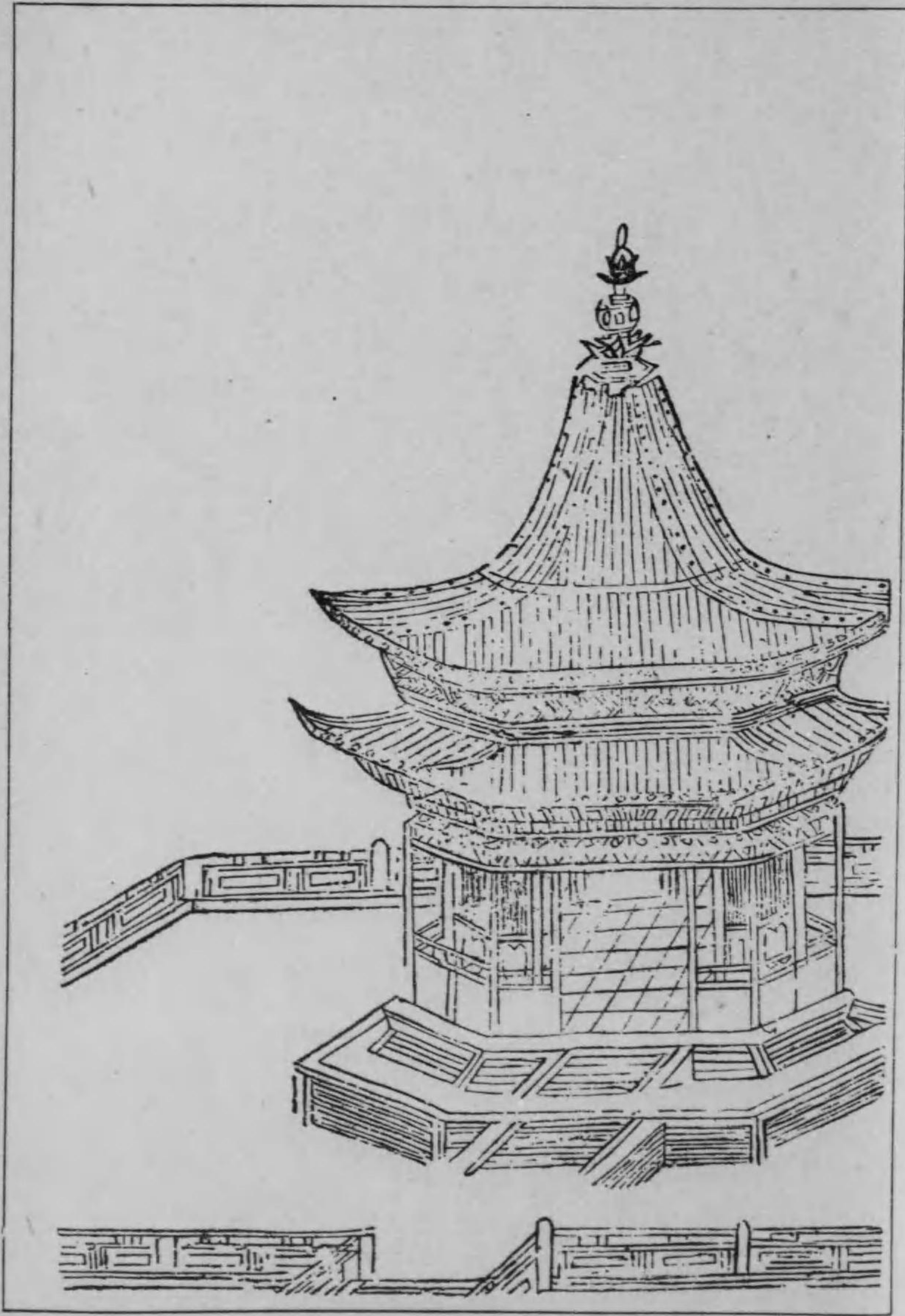


五八三

圖六十四百二第

平臺式 (上)
遠亭式 (下)

五八二

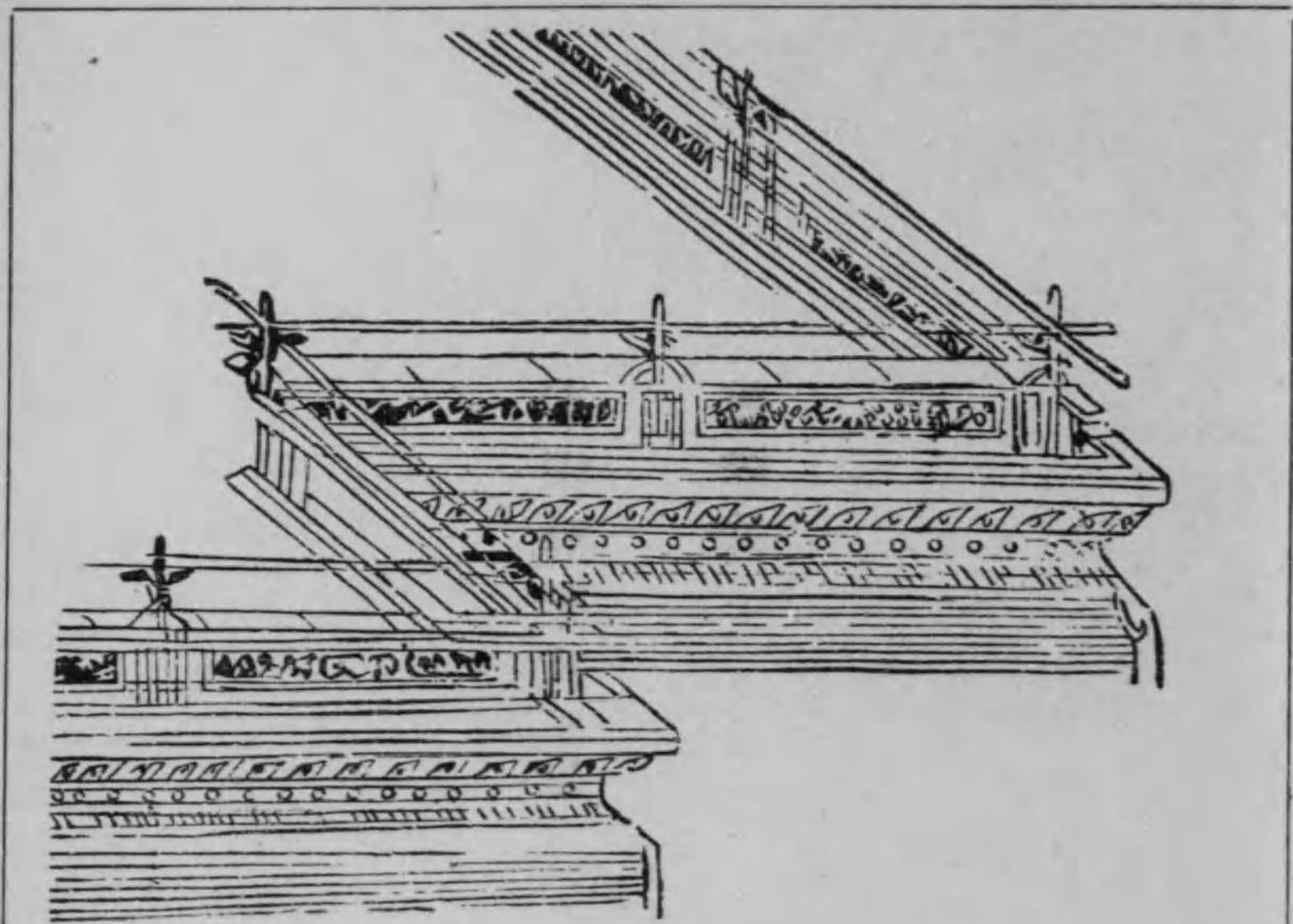


五八五

圖七十四百二第

九曲十八面亭式

五八四

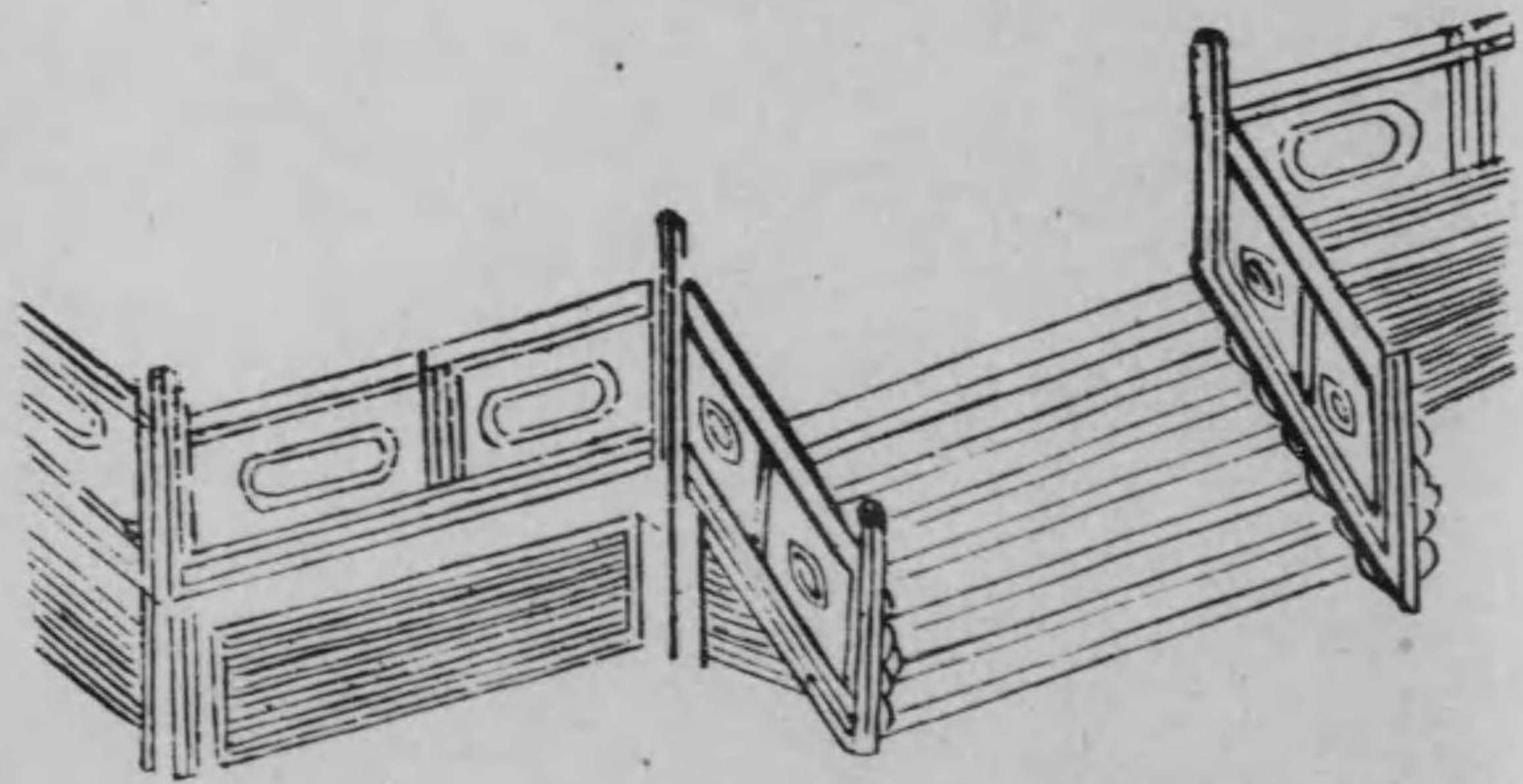
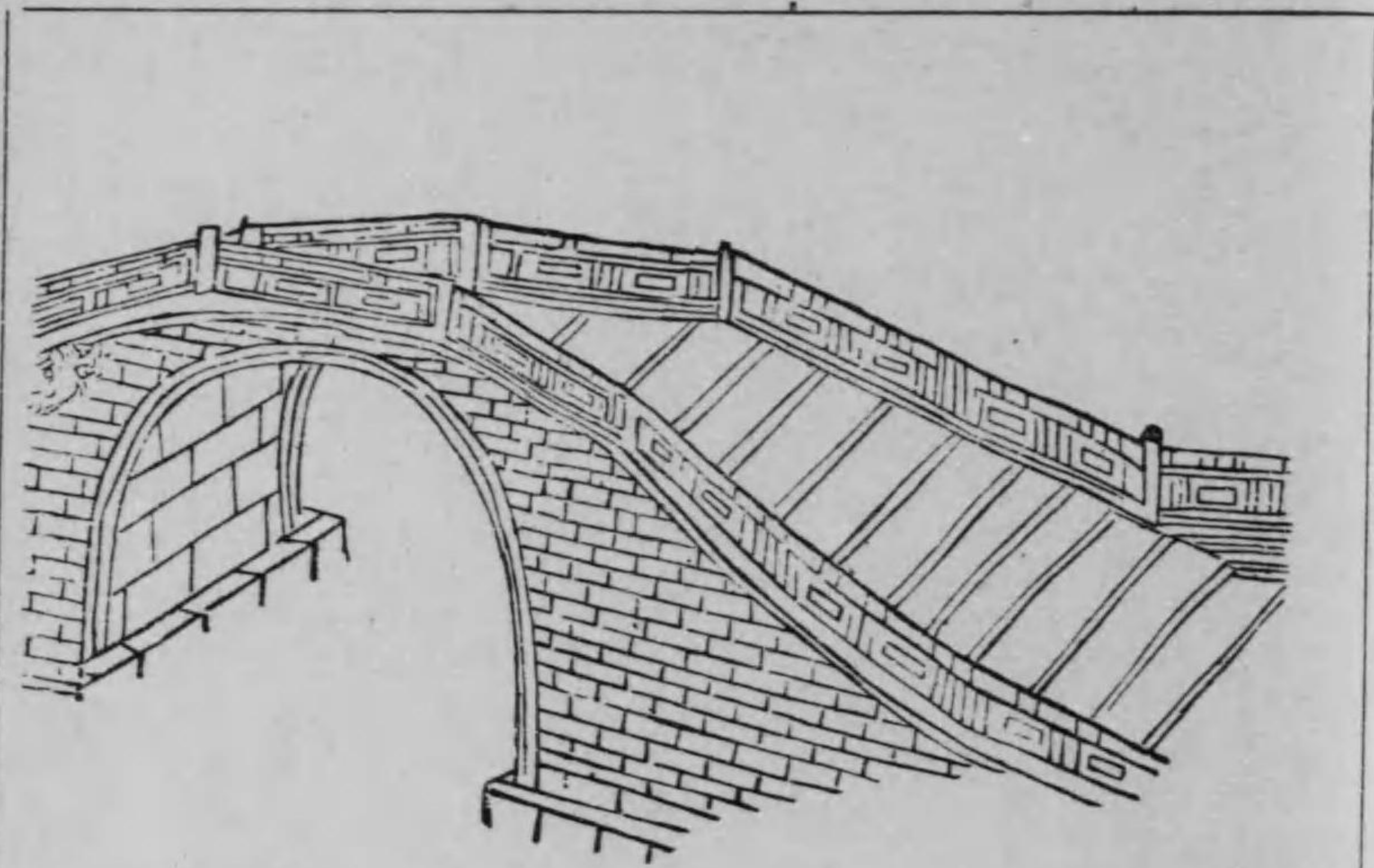


雕欄玉榭式 (上)

官府門第式 (下)



圖八十四百二第



五八九

圖九十四百二第

階陸式
(下)

工細橋梁式(上)

五八八

舟
楫
法
二十一式

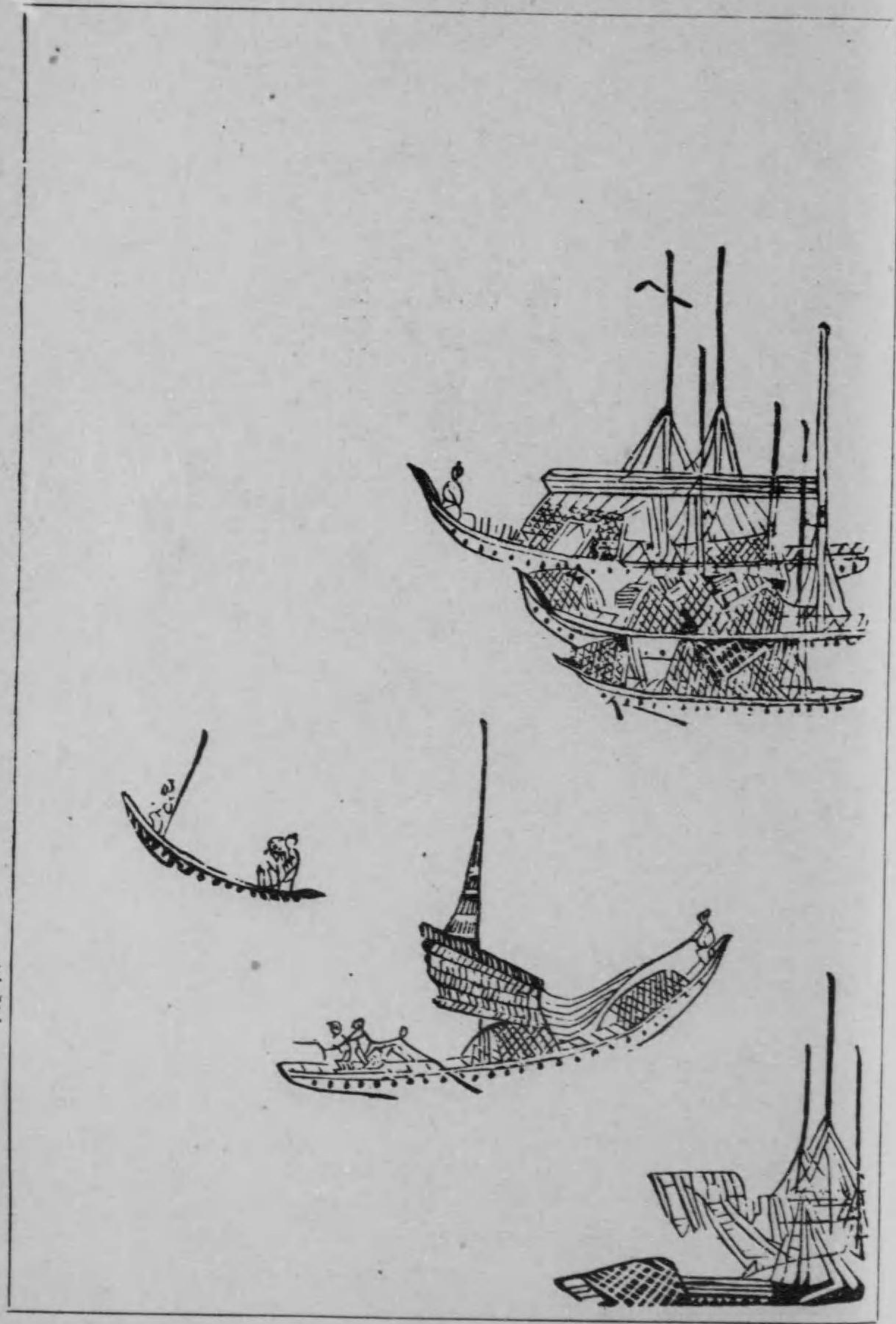
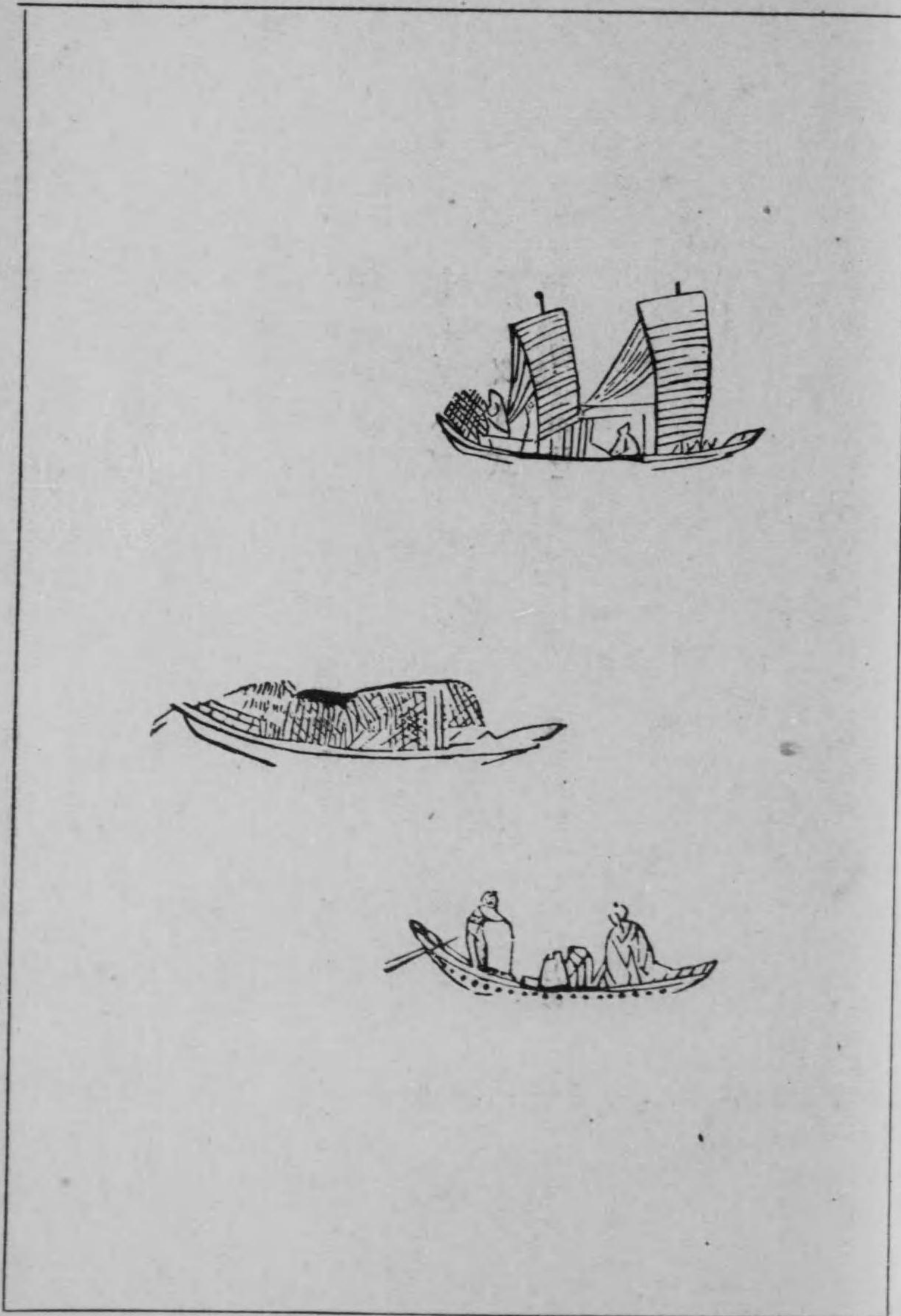


圖 十 五 百 二 第

泊船(右上)
 渡船(左中)
 開貼(右下)



圖一十五百二第

雙帆を掛くる船(上)
 雨景の漁艇 (中)
 酒を載する遊船(下)

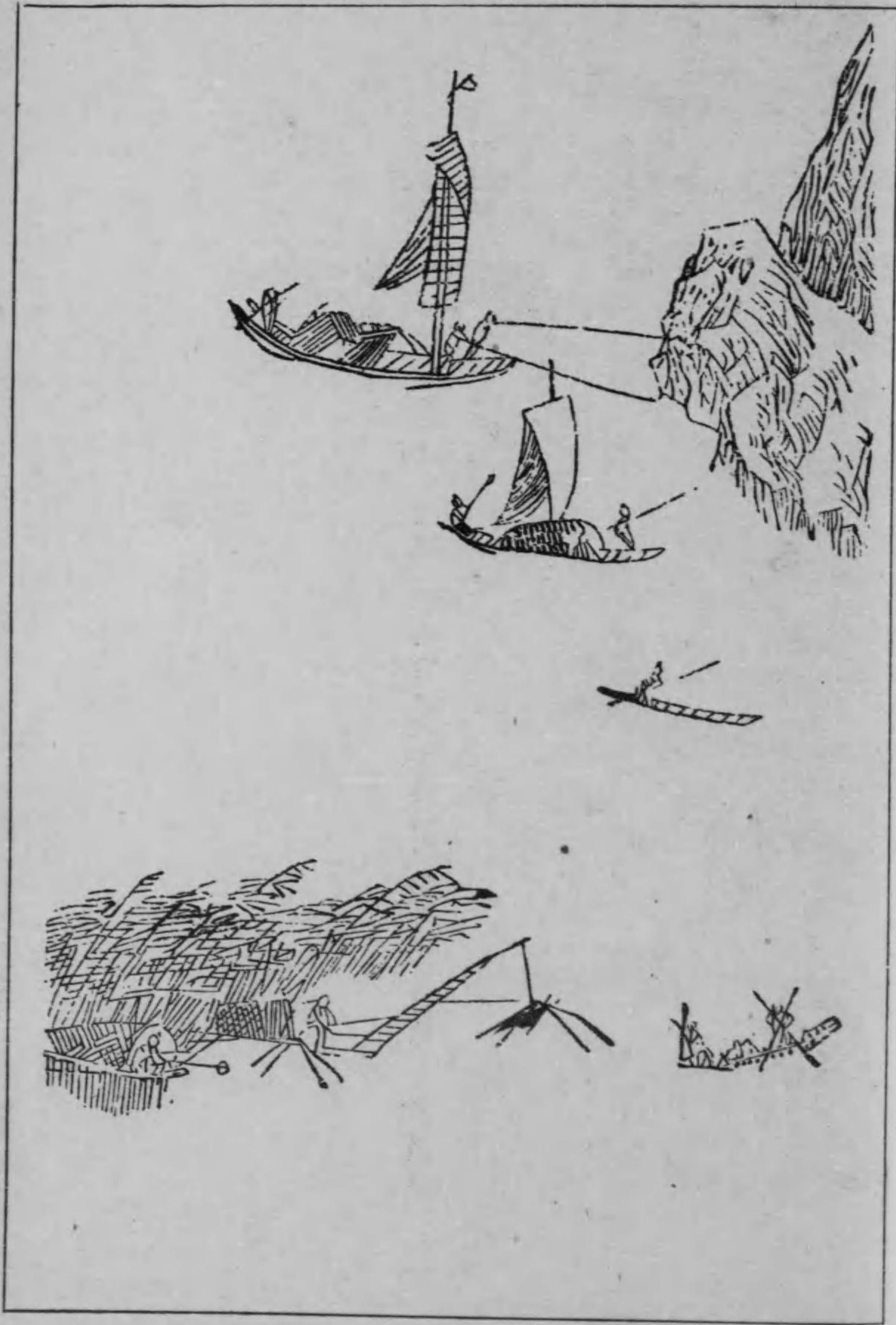


圖 二 十 五 百 二 第

江船(上)

江を上るものあり下るものあり帆を揚げ簞を擇へ各氣力を用ゆる状を畫き以て長江の上下風あるを見はす。

抵に着く式(中)

魚を叉す式(下)

魚を捕ふるよつてある習よつてあるは平沙叢葦の處に畫いて落雁宿鷗と汀烟江月の光景を争ふに宜し。

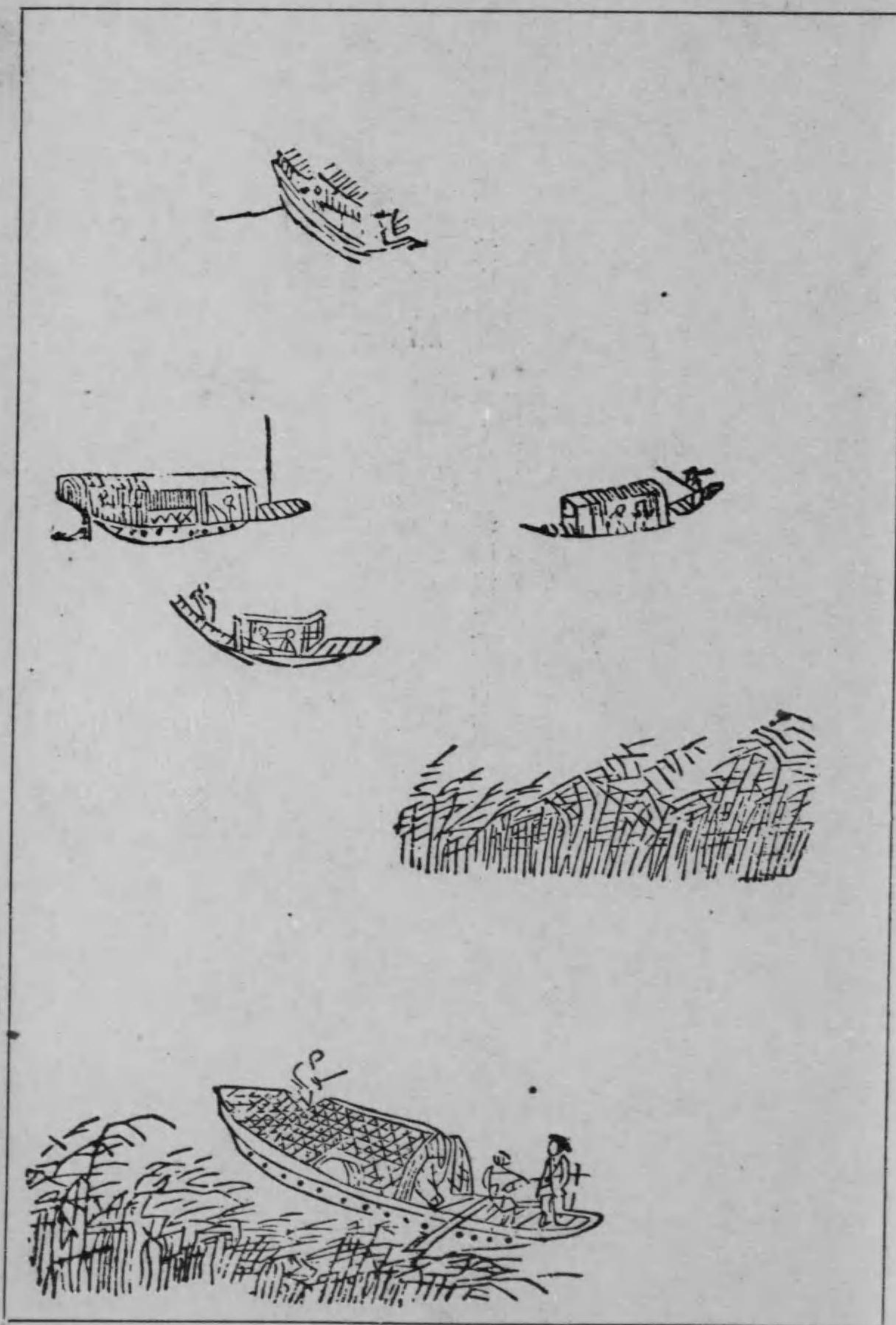


五九九

圖三十五百二第

峽船(上)
 川景に畫くべきものにて、三峽にては索を以て奔湍を挽き上ぐ。決して吳越平
 波の間に畫いてはならぬ。
 大罾(下)

五九八



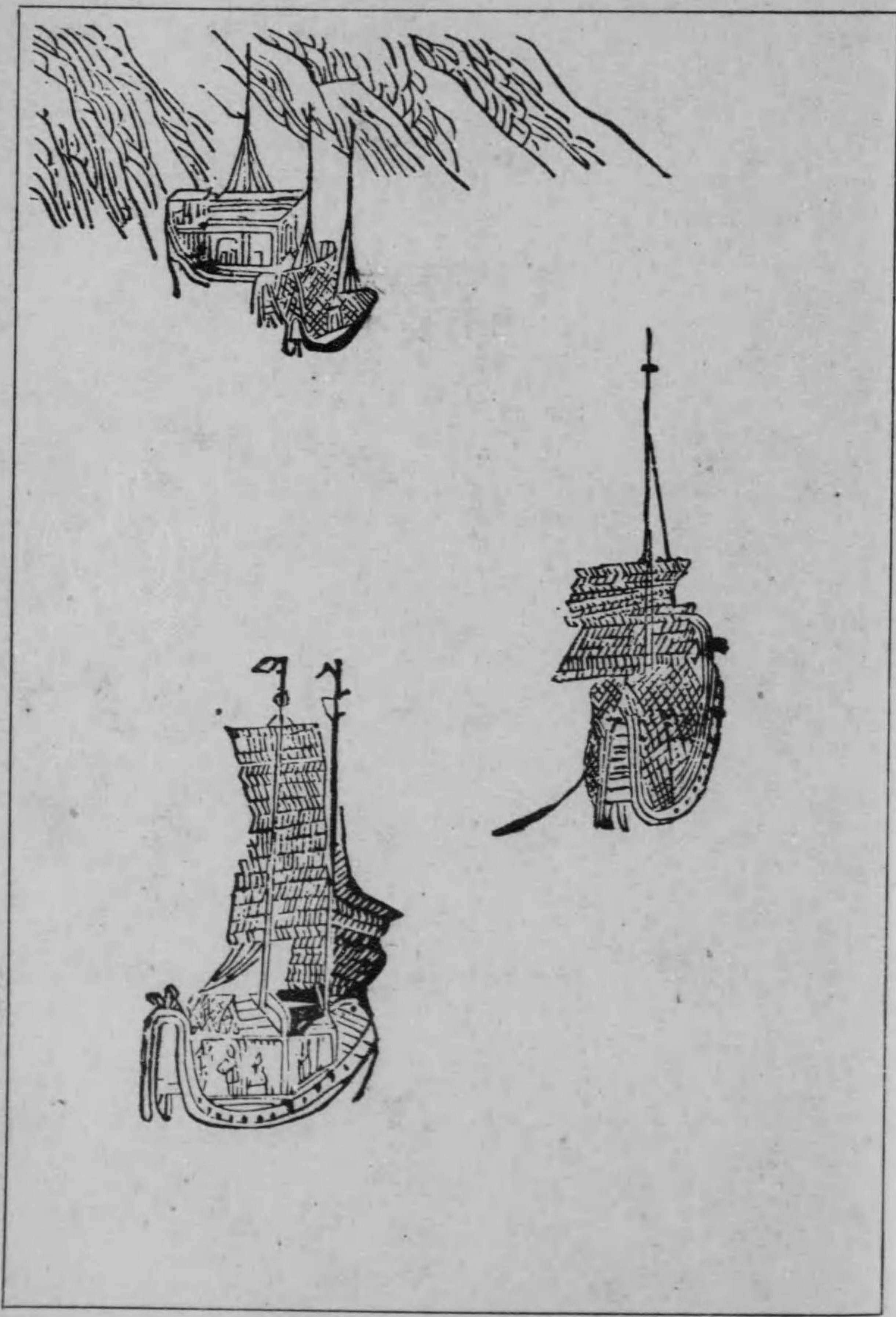
圖四十五百二第

湖船(上)

波光は練絹の如く湖澱の起らぬ時酒を載せ詩を尋るに宜し。

櫓船(中)

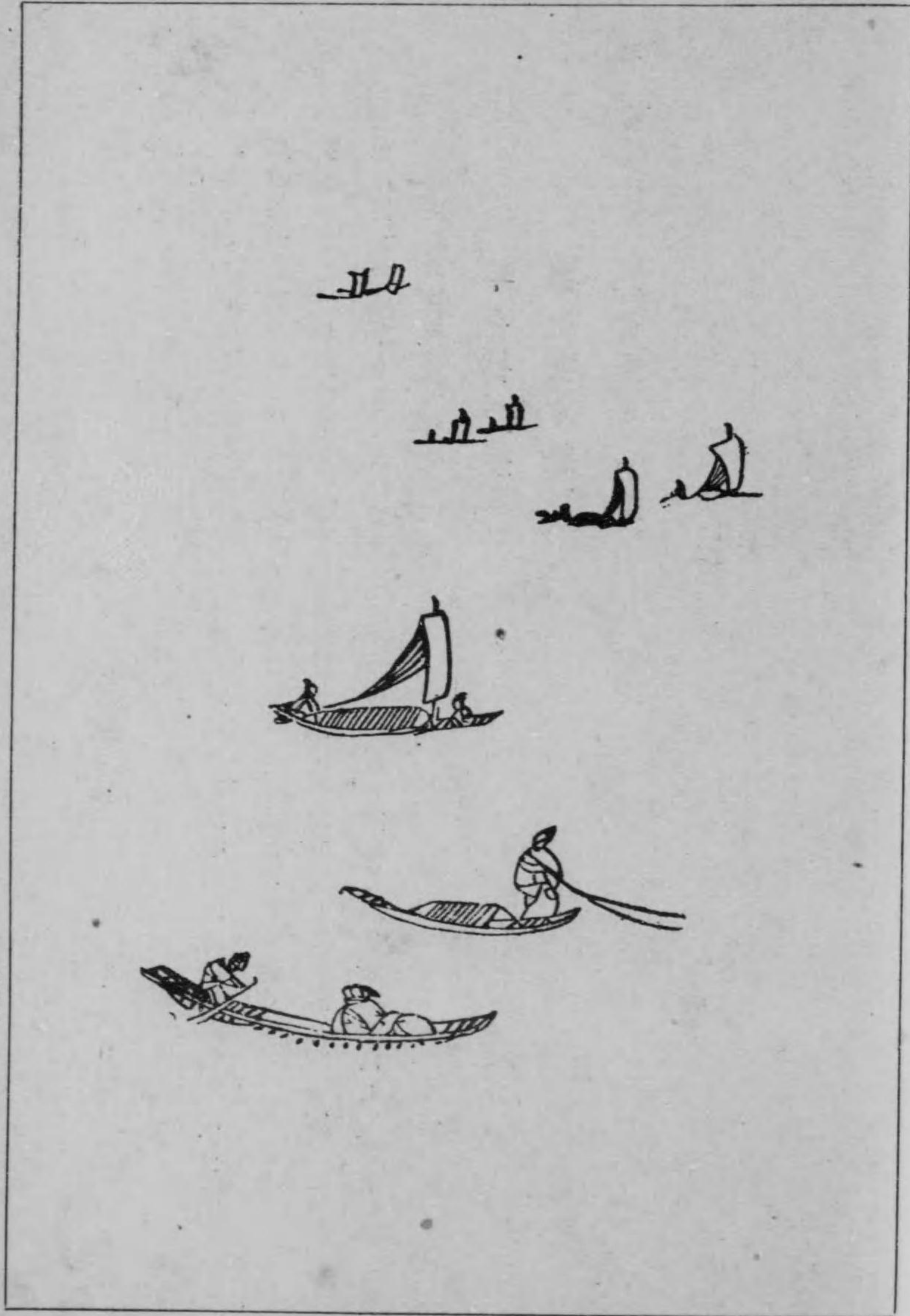
月下及び葭菼の中に晝くに宜し人をして歎乃を聞くの思あらしむ。



圖五十五百二第

巨船

江海波濤の中に畫く帆を揚げ浪を破り頃刻にして千里に走るの勢あらしむ。



圖六十五百二第

遠近に従ひ擇び用ふ。
 大小の風帆 (上)
 網を撒する船 (中)
 客を渡す船 (下)

竿を持ち楫を撃つ船は必ずしも全體を露はさず、蘆中か柳外に點綴すれば、自然と神龍が首を見はして尾を見さぬが如き妙がある。然れども亦之を畫く位置を考へることが必要である。若し位置が促り横に一舟を亘して全然上下を塞ぐときは何等の妙處もないものである。故に或は首を露はし或は尾を露はして、餘有て盡ざるの妙を畫かねばならぬ。

竿を持つ船
 楫を突く船
 釣を垂るゝ船



圖七十五百二第

器
具
法
二十六式

几席屏榻の諸式

既に亭榭を畫けば之を一物も備附なき空洞として置くことは出来ない。必ず憑るべき几や藉くべき席なども畫かねばならぬ。此等の物を畫くには太た工ではいけない。工なれば俗である。亦太た無法にてもいけない。法無ければ紊れる。たとひ山水は絶佳にして居亭頗る雅致ありと雖も、其中にある一二服御の器物が相稱はざるときは、未だ白壁の微瑕たるを免れない。

大凡そ屋か左向なれば几榻も亦左向なるべく、屋が右向なれば几榻も右向に、側面なれば側面にすべきものである。大にして盈尺小にして分許なるも其法は皆此に過ぎなく。

正長几の式

圓机の式

竹椅の式

藤床の式

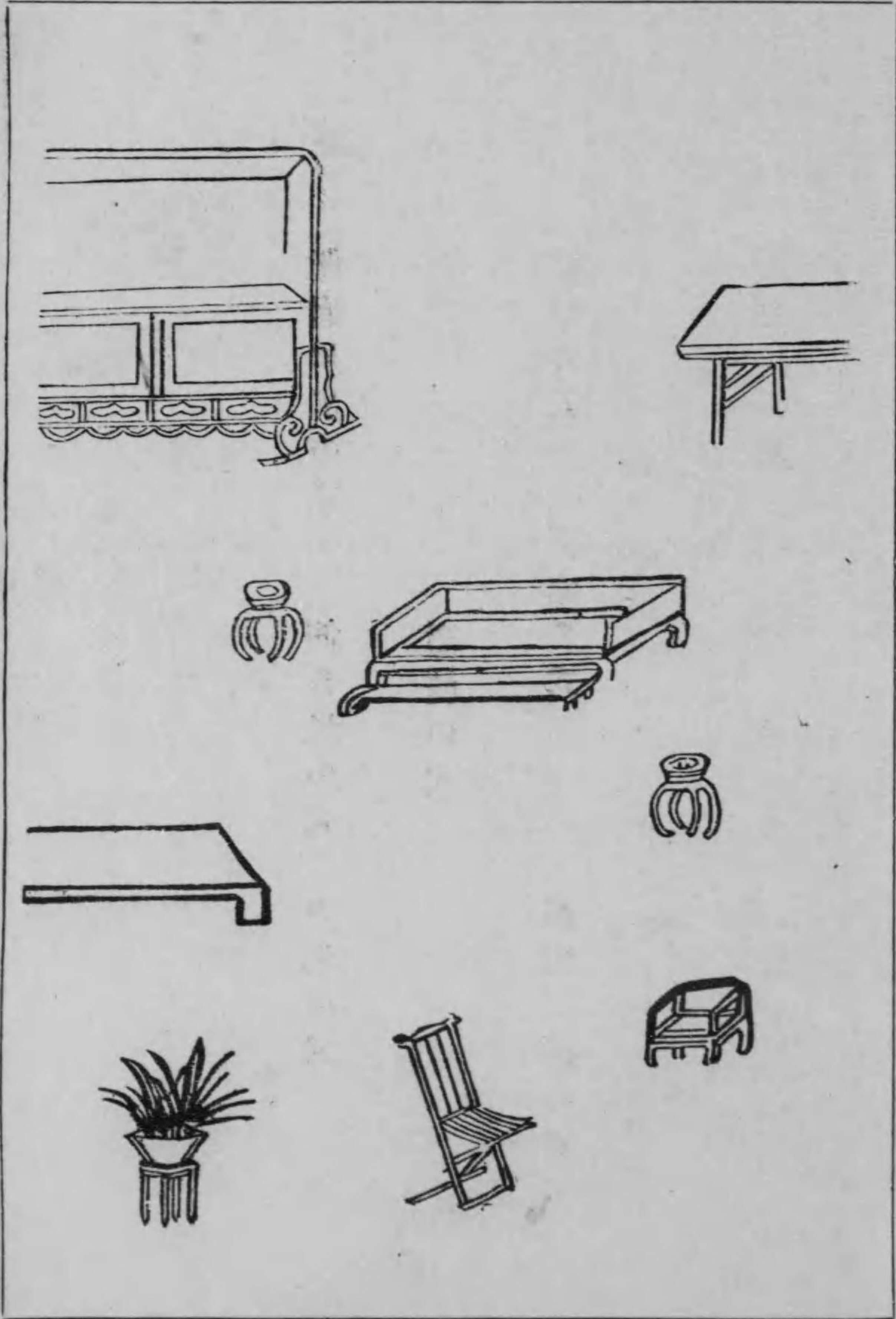
摺椅の式

圓机の式

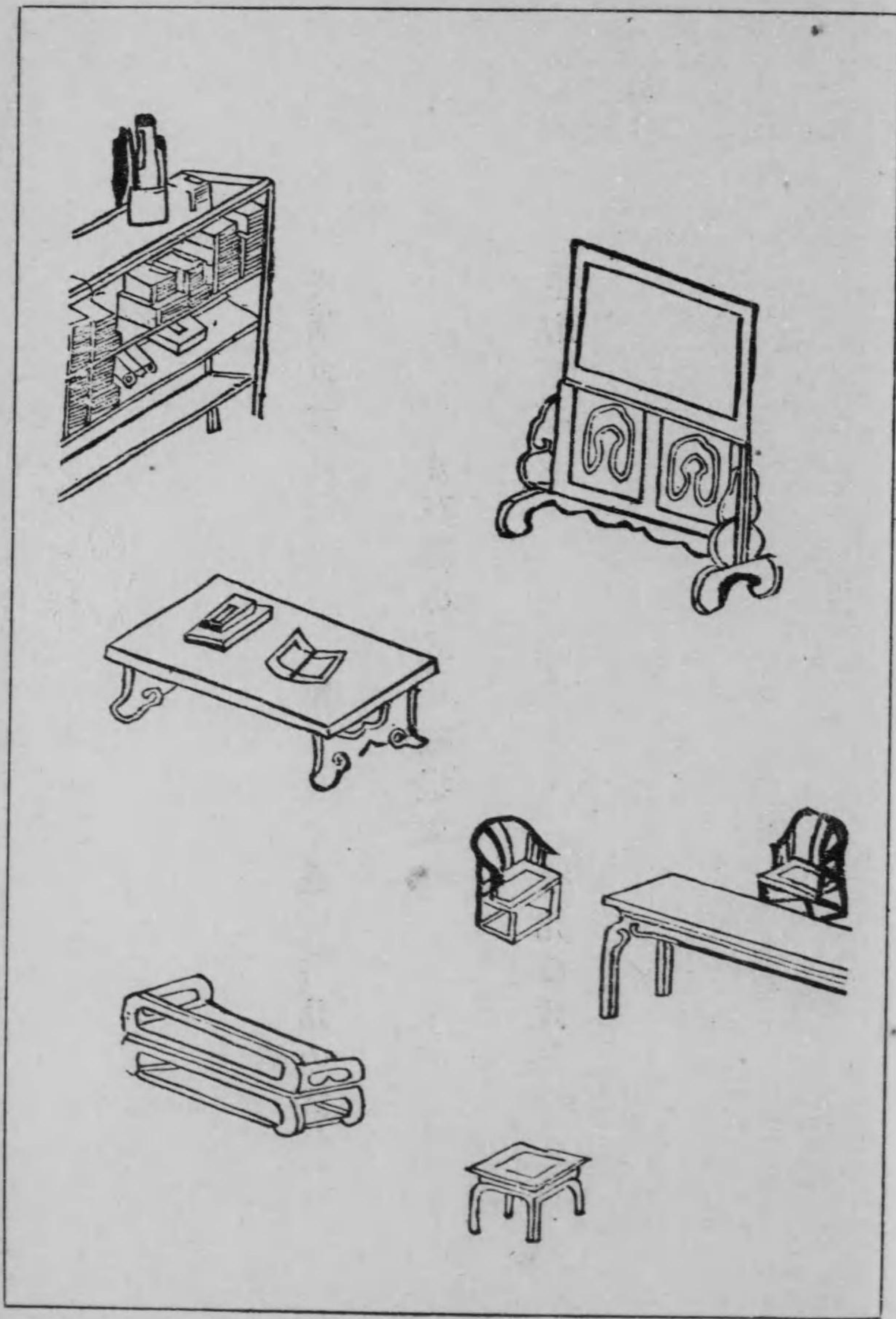
正屏風の式

板床の式

盆蘭の式



圖八十五百二第



圖九十五百二第

側面屏風の式

側長机の式

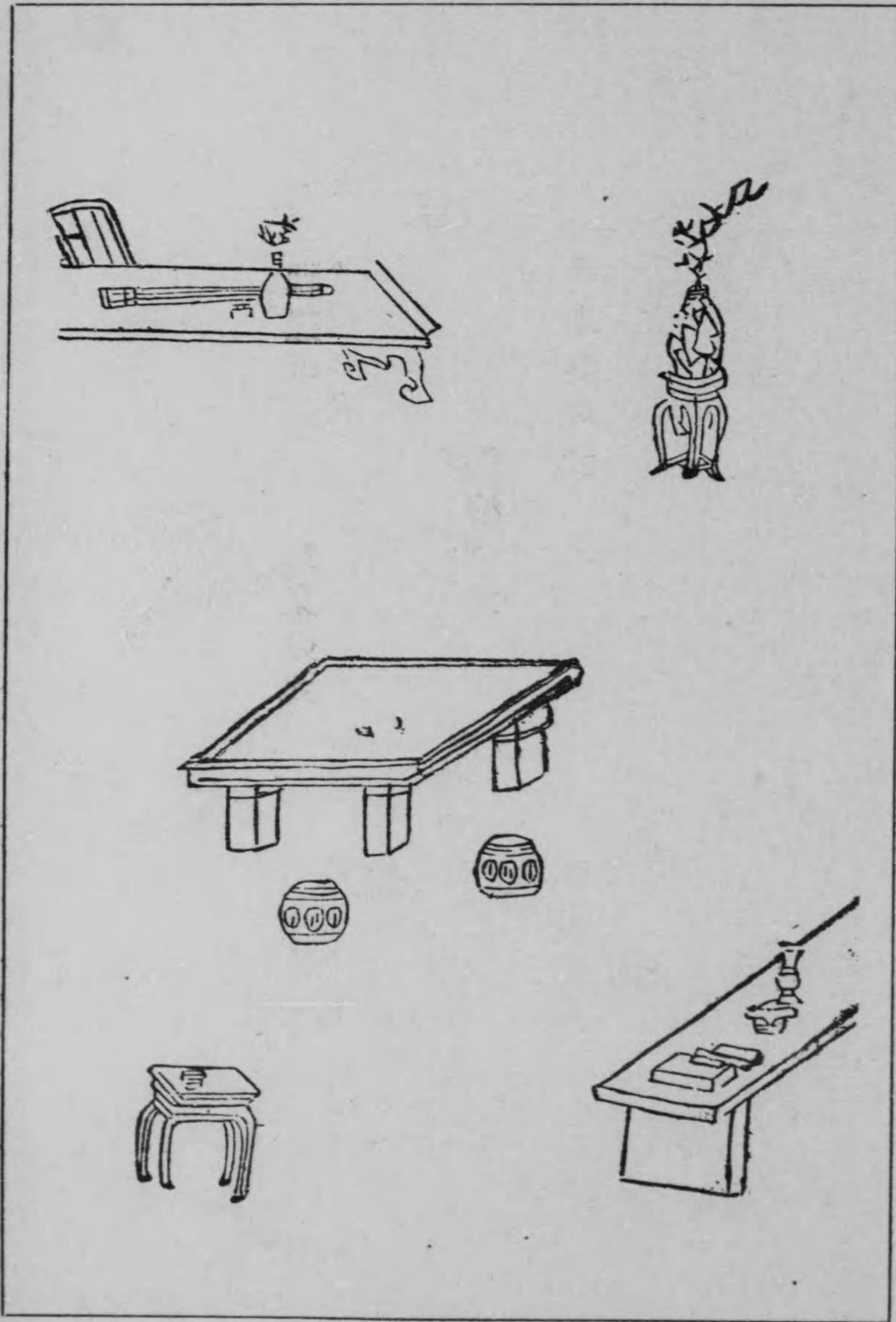
方机の式

圈椅の式

書架の式

書案の式

藤床反面の式



圖十六百二第

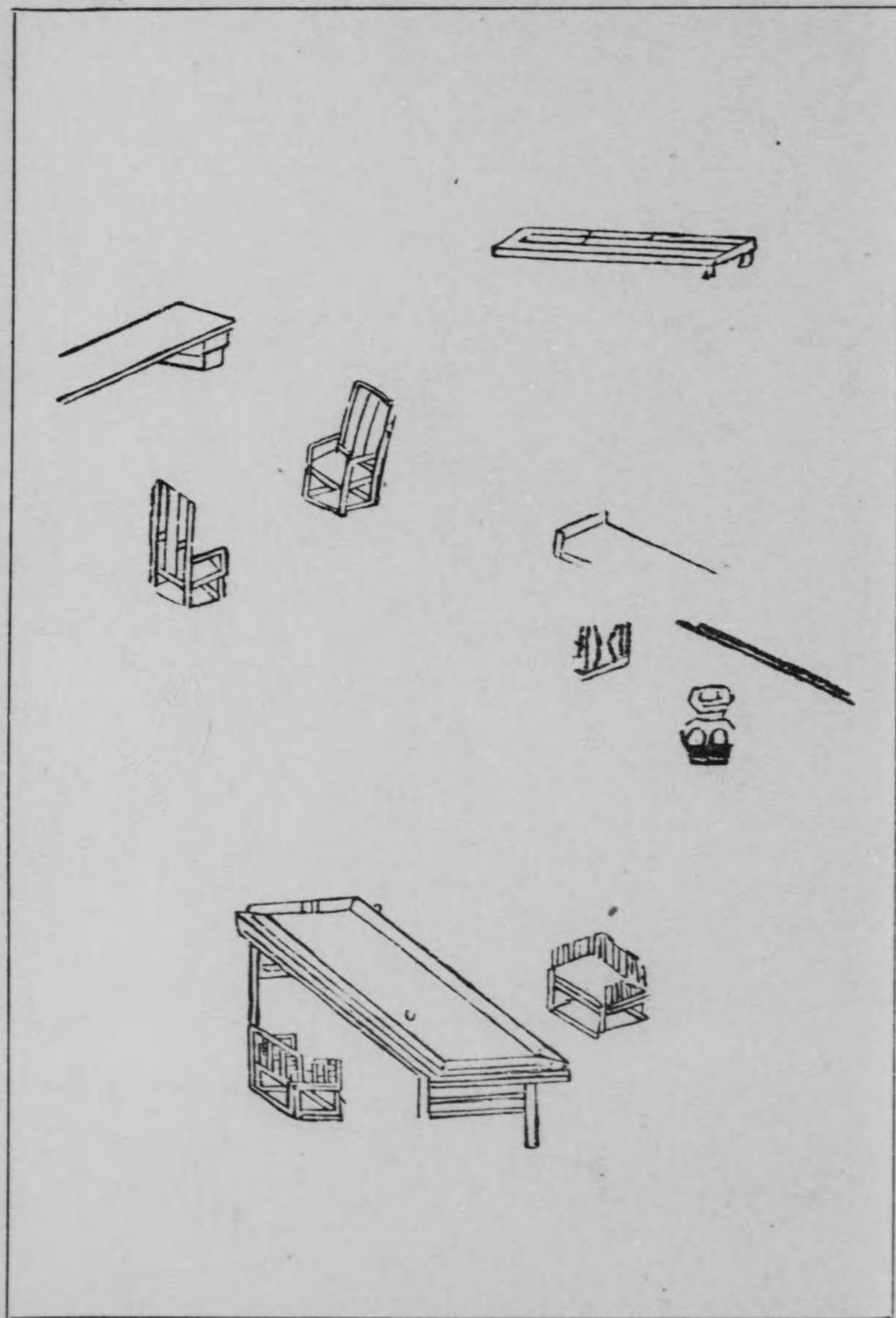
架瓶の式

長石書几の式

方石棋の式 磁墩の式

琴几の式

香几の式



圖一十六百二第

脚踢の式 長桌の式

靠椅の式

石凳の式

飯桌の式

摹倣諸家式

四幅

原本には方冊式宮統式摺扇式横長式各十幅あるも、今茲に宮統式中の三幅及び摺扇式中の一幅を掲ぐ。

李公麟の僊山樓閣の圖



六三三

圖 二 十 六



六三三

百 二 第



李咸熙の畫王摩詰の詩

裂_レ地_ヲ多_ク盤_ハ屈_ス。挿_シ天_ヲ多_ク峭_ク嶒_ク。瀑_ク泉_ノ孔_ヲ而_シ噴_ス。怪_ク石_ヲ看_キ欲_ク落_ス。種_ク田_ヲ燒_キ白_ク雲_ヲ。
斫_シ漆_ヲ響_ク丹_ヲ堅_ク。行_キ隨_ヒ捨_リ栗_ヲ狽_ク。歸_リ對_シ巢_ヲ松_ノ鶴_ノ。
王摩詰の燕子龕の詩である。雄奇蒼鬱李咸熙の筆にあらざれば寫すことが
出来ぬ。



六二六 第三十



第 二 百

王叔明の畫

襄陽、丘彦童居笠澤。關小軒、輿搖成江直。風帆沙鳥。如在几席間。虞
勝伯顔曰看帆。請王叔明畫之。

叔明の落款は多く小篆を用ひて居る從て其の畫法も亦篆意がある。



圖 四 十 六



百 二 第



范寬の畫の周賀の詩

一宿五峰林渡寺。虛郎中夜聲聲分。疎林未落上方月。深澗忽生平地，
雲。幽鳥背泉栖靜境。遠人當竹想遺文。暫來此地歇勞足。望斷故鄉
滄海濱。



六三五

圖 五 十 六



六三四

百 二 第

書後に題す

本書の原本は、李流芳が古人の畫例若干を輯めて標釋を加へ置けるを、李笠翁の婿なる沈心友が金陵の芥子園に居る時、王安節に囑して増輯編次せしめたるものにして、笠翁之を見て以て摩滅すべからざるの書となし、初めて梓に付したるものなり、我邦には、寛永年間黄蘗の僧に依り渡來したるものなりと云ふ。

芥子園は、李笠翁の金陵に在る別業にして、其の地一小丘に過ぎざるを以て、其の微なるを狀つて芥子と名づけたるものなりと云ふ。

李流芳字は長蘅、明の人、性山水を好み筆墨淋漓、其の畫は元に入入して、尤も呈仲圭を好み。

沈心友字は因伯、西泠又は克菴と號す、清の人なり。

王槩字は安節、清の人にして金陵に家す、詩文を善くし澄心堂紙賦最も當時に稱せらる、青在堂、鹿柴氏は皆其の別號なり。

李笠翁名は漁漸に生れて後金陵に移る、明末清初の人なり、性任俠にして遊歴を好み、足跡海内に普し、其の嶺南に赴くや十八灘を過ぎて前後十八灘行の大作あり、著書頗る多く、常に創見を出して古人の糟粕を嘗めず、戯曲の十種曲、小説の十二樓、隨筆の笠翁一家言全集は、最も世に稱せらる。

本書は實に歴代名流の長を彙めたるものにして、畫論の粹を網羅し、樹葉山石より點景の人物及鳥獸墻屋門逕城郭橋梁寺院樓塔臺閣舟楫器具に至るまで、一一其の圖例を掲げて解説を加へ詳述餘蘊なし、世の繪事に志し或は鑑賞を試みんとするの士は、以て研鑽の好資料、座右の好侶件として、誠に完璧となすに足らん。

大正七年十一月

東京 漢畫研究会に於て

佐 中 霧 海

大正七年十二月十五日印刷
大正七年十二月二十日發行

邦譯芥子園山水畫譜

定價金六圓

版

權

所

有



東京府下轄司ヶ谷村旭出五十三番地

著 者 森 田 但 山

東京市本郷區本郷四丁目四番地

發 行 者 漢 畫 研 究 會

右代表者 山 添 平 作

東京市芝區愛宕下町二丁目五番地

印 刷 者 牛 坂 三 郎

東京市芝區愛宕下町二丁目五番地

印 刷 所 邦 文 社

發 賣 元

東京市本郷區本郷四丁目
電話小石川二三二七番
振替東京九五二七番

文 武 堂 書 店

松本文學博士▲今泉雄作先生序▲森田但山畫伯譯

邦芥子園人物畫譜

全一冊菊判洋裝美本
插畫五百五十餘頁
紙數五百五十餘頁
正價五圓五十錢
送料小包十二錢

●內容

●寫真秘訣五十圖 ●仙佛傳四十圖 ●賢俊傳三十八圖
●美人傳二十四圖
芥子園畫傳の眞價は已に定評あり、而して是が翻刻も尠からずと雖も、其人物畫傳に至りては孰れも缺如せり、本會は茲に鑑み名家の秘庫に之が原本を得、最も鮮明なる凸版にて複製し、解説は平易なる邦文に譯し、加ふるに畫傳中人物の年代を記す、世の美術工藝家諸士の師友參考書として絶好の良書たるのみならず家庭に於て趣味の涵養に最も適せり。

今泉雄作先生序▲森田但山畫伯譯

邦芥舟學畫編

全一冊菊判洋裝美本
參考插畫數餘頁
紙數三百餘頁
正價三圓八十錢
送料小包八錢

今泉先生曰

畫家にして未だ本書を繙かざるものは、美術の眞諦を究むるの士に非ず本書を解せざる人は、鑑賞家として價值なしと蓋し無二の寶典たるべし。

發行所 東京 東區 本町四丁目 文武堂 發賣元 東京 東區 本町四丁目 文武堂 發賣元 東京 東區 本町四丁目 文武堂 發賣元

724.2

011

26

終